

## M-GTA 研究会 News Letter No.59

**編集・発行：**M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：[grounded@ml.rikkyo.ac.jp](mailto:grounded@ml.rikkyo.ac.jp)

研究会のホームページ：<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/index.html>

**世話人：**阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、  
塚原節子、都丸けい子、林葉子、水戸美津子、三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

### <目次>

◇お知らせ	...	1
◇第 59 回定例研究会の報告	...	1
◇近況報告	...	24
◇編集後記	...	25

### ◇お知らせ

第 60 回 M-GTA 研究会は 3 月 24 日（土）（13：00～18：00）に、立教大学（池袋キャンパス）で行います。近々メーリングリストでご連絡しますので、皆様ふるってご参加下さい。

### ◇第 59 回定例研究会の報告

【日時】1 月 7 日（土）（13：00～18：00）

【場所】立教大学（池袋キャンパス）

【出席者】

会員〈57 名〉

赤畑 淳（立教大学）・浅川 典子（埼玉医科大学）・浅野 正嗣（金城学院大学）・阿部 正子（長野県看護大学）・市江 和子（聖隷クリストファー大学）・伊藤 祐紀子（北海道）・今泉 郷子（武蔵野大学）・上野 恭子（順天堂大学）・氏原 恵子（聖隷クリストファー大学）・大賀 有記（ル

一テル学院大学)・大橋 重子(法政大学)・大見 サキエ(浜松医科大学)・梶原 葉月(Pet Lovers Meeting)・加藤 明日香(東京大学)・加藤 隆子(東京医科歯科大学)・鴨澤 小織(日本大学)・唐田 順子(西武文理大学)・菊地 真実(早稲田大学)・木下 康仁(立教大学)・倉田 貞美(浜松医科大学)・小石 恵美子(大田区立特別養護老人ホーム羽田)・斎藤 まさ子(新潟青陵大学)・佐川 佳南枝(熊本保健科学大学)・標 美奈子(慶應義塾大学)・竹下 浩(ベネッセコーポレーション)・田島 美帆(青山学院大学)・田中 満由美(山口大学)・谷口 須美恵(青山学院大学)・玉城 清子(沖縄県立看護大学)・田村 朋子(立教大学)・樽矢 裕子(国立看護大学校)・丹野 ひろみ(桜美林大学)・張 勇(政策研究大学院大学)・辻野 久美子(山口大学)・辻村 真由子(千葉大学)・寺崎 伸一((有)藍穂 ケアプランわたりだ)・徳永 あかね(神田外語大学)・都丸 けい子(平成国際大学)・鳥居 千恵(聖隷クリストファー大学)・中村 聡美(NTT 東日本関東病院)・成木 弘子(国立保健医療科学院)・西村 信子(白百合女子大学)・馬場 洋介(株式会社リクルートキャリアコンサルティング)・林 裕栄(埼玉県立大学)・保正 友子(立正大学)・堀田 昇吾(国立看護大学校)・松下 年子(埼玉医科大学)・美甘 きよ(筑波大学)・宮崎 貴久子(京都大学)・宮本 美佐(国立看護大学校)・目黒 明子(相州病院)・山崎 浩司(信州大学)・山下 ひろみ(浜松医師会看護高等専修学校)・山本 佐枝子(国立看護大学校)・横堀 ひろ(群馬)・横山 登志子(札幌学院大学)・横山 豊治(新潟医療福祉大学)

## 【第1報告 研究発表】

### 「公立小学校6年生児童の外国語(英語)活動の体験—情意面に焦点をあてて」

田村朋子 (立教大学ランゲージセンター)

#### 1. 研究の背景・対象

＜文部科学省の進める公立小学校での外国語活動の施策と概要＞

(『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』(文部科学省, 2008) にもとづく)

- ＊ 1998年(平成10年)に改訂された学習指導要領で『総合的な学習の時間』が設けられ、「国際理解教育の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること」という規定のもと、外国語(英語)活動が、全国の小学校で行われるようになった。
- ＊ 2002年(平成14年)の調査では、全国で約88%の小学校が英語活動を行っていた。
- ＊ 2007年(平成19年)には、約97%の小学校で行われるようになった。
- ＊ 2008年(平成20年)小学校学習指導要領を改訂し、小学校5、6年生対象に外国語活動が新設される。
- ＊ 2011年(平成23年)全国の公立小学校の5、6学年に年間35時間の外国語活動を必修化した。

### <外国語活動の目標の三本柱>

(『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』(文部科学省, 2008, p.) から抜粋)

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

- \* 外国語活動は「英語を取り扱うことを原則とした」(文部科学省, 2008, p.6) と位置づけられているので、本研究では、外国語(英語)活動と表記する。
- \* 外国語活動の指導者は、「学級担任の教師または外国語活動を担当する教師が行うこととし、授業の実施にあたっては、ネイティブ・スピーカーの活用に努めるとともに、地域の実態に応じて、外国語に堪能な地域の人々の協力を得るなど、指導体制を充実すること。(下線部筆者)」(文部科学省, 2008, p.18) とある。学級担任 (HRT: Homeroom Teacher) が主導で、外国人教師(ALT: Assistant Language Teacher, 本研究では、AET: Assistant English Teacher) とチームティーチングで進めていく形が一般的である。

## 2. 研究の必要性

—特に小学校6年生児童の外国語(英語)活動中の情意について質的に研究する必要性

①必修化された公立小学校5、6年生の外国語活動の目標、内容は情意面の育成に焦点が当たっている。

\*平成20年(2008年)8月に出された文部科学省の新学習指導要領

小学校での外国語(英語)活動(5、6年生対象)、中学校での外国語(英語)ともに「外国語を通じての言語や文化に体験に理解を深め、積極的にコミュニケーションの態度の育成を図る」ことに目標が定められている。

◎中学校の英語の目的は中学校での英語の内容は「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能の実践的運用能力を養うこととある。

◎小学校の外国語活動の内容は「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。」「積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。」「外国語の音声やリズムなどになれ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。」などが挙げられ、英語の技能というよりも、英語を通じた情意面の育成に焦点が当てられ、小学校での外国語活動中における児童のもつ情意について研究することは、現場においても有意義であるとされる。(下線部筆者)

\* 公立小学校の外国語(英語)活動の現場では、児童は活動中に様々な情意を抱いているはずである。どのような情意がどのような情意と関連し、どのような情意がどのような情意を引き起こしているかの仕組みを一例ではあるが、具体的に示唆して、現場で応用してもらうことが、今後の公立小学校での(英語)外国語活動を実践していく上で、教

師が、児童の持つ情意に考慮した活動をおこない、カリキュラムを立てていくために役立つと考える。

②公立小学校5、6年生の外国語（英語）活動は、特殊な環境に置かれている。

\* 2011年より5、6年生に対して必修化された公立小学校での外国語（英語）活動は、外国語（英語）に慣れ親しむ、国際理解を深めることが目的で、児童は、中学校で行われていような4技能を学ぶ英語学習や英語習得が目的の従来の英語教育の枠に当てはまらない環境。

\* 英語が専門でない中には英語が苦手だと感じている担任教師が主導でおこなっている。従来の、英語の学習、習得が目的の英語教育を受けた子どもたちとは違った、彼ら特有の情意が見られるはず。そのような、彼ら特有の情意は、このような従来の英語学習、英語授業とはちがった立場で今後の日本の公立小学校の外国語（英語）活動の進めることになった現場において考慮されるべき点である。

③ 外国語（英語）活動が必修化された5,6年生を対象の児童のもつ情意について検証する必要がある。

\* 小学校は1～6年生までの発達段階の違った児童が在籍する、5,6年生の児童の外国語（英語）活動への現場の応用に役立つ研究と考えると、発達段階を考慮して1、2年生の児童が持つ情意と、5、6年生のもつ情意は同じではない。したがって、5,6年生のもつ情意に特定して調べる必要がある。

\* 本研究の分析対象者である6年生の児童は6年生の3月にインタビューを受けている。すでに、5年生、6年生と外国語（英語）活動を体験していろいろなことを感じている6年生児童のもつ情意を調べるのは有益である。

④小学校英語の情意の研究は、従来の英語学習の枠に当てはめた量的研究が多い。

\* 元田（2005）は、第二言語教育の情意要因とは、動機付け、態度、自尊感情、自信、不安、信念など学習者の心理面に関するものであると述べている。

\* 英語教育学の分野では、第二言語学習者、外国語学習者のもつ情意の研究は既に数多くなされているが、多くは、質問紙を用いて量的に行われている。子どもが対象の研究は比較的少なく、第二言語習得や外国語習得、外国語学習における情意の研究を踏襲した日本の公立小学校の外国語活動における子どもの持つ情意要因についての研究は増えつつあるが、多くは全国の公立小学校に質問紙を送るなど量的に行われている。例として

①「児童のもつ不安」（松宮 2005, 2006, 2009, 2010）

②「児童の動機付け、外国語へ興味、WTC（外国語を使って他者と対話する意思）」（Nishida 2009）

③「児童のもつ不安と動機づけ」（Nishida, 2008）

④「児童のもつ『英語への好感度』と動機づけの関係」（國本, 2006）

⑤「情意要因と発達と性差」（Carreira 2006）

これらの研究は、特定の情意があると想定し検証する研究が主である。

しかし、従来の外国語教育、第二言語教育の枠に当てはまらない外国語（英語）活動を体験している児童は、従来研究で検証されてきたものとは違った情意を持っていると想定されるので、従来の外国語教育、第二言語教育にみられる情意があると仮定してそれを検証するという仮説検証型の研究よりも、新たに児童がどのような情意をもっているのか、どのような情意がどのような情意に関連しているのかなど、児童が外国語（英語）活動中にもつ情意の関連性や動きについてのしくみについて仮説を生成するタイプの研究の方が向いていると思う。このような情意の関連性やうごきを知るためには、M-GTAを用いて調べる必要があると考える。

### 3. 調査方法

#### フィールド：

大阪府下のある公立小学校(A小学校)において、2008年11月から2009年2月まで（3クラス（HRT1,2,3のクラス））と、2009年5月から2010年2月まで（2クラスHRT2クラスとHRT4のクラス）の6年生の外国語（英語）活動の様子を観察した。観察した児童のうち、2009年3月に25名、2010年3月に18名の計43名に、主に「英語活動の時間にどのように感じているか、英語に対してどのように思うか」について聞いた。

#### \*2009年3月（2008年度）のインタビュー

6年生：25名（各クラス7～10名）

（観察の結果、目立っている児童、自信のない態度を見せた児童、活動中おとなしい児童、HRTが選んだ英語の得意な児童、英語が苦手（不安がある）児童）

#### \*2010年3月（2009年度）のインタビュー

6年生：18名（各クラス9名ずつ）

（観察の結果、各クラスで目立っている児童、自信のない態度を見せた児童、活動中おとなしい児童、英語が得意そうな児童、不得意そうな児童 インタビュー対象の児童を選んだあと、各児童についてHRTに英語が得意、不得意、まあまあ得意かのHRTの印象を聞いた）

#### 授業形態：

\* HRTが主導で進める、AETとのチームティーチング。（前に2人立って教えるスタイル。）AETは毎週金曜日に週一回来ていた。1日かけてその日外国語（英語）活動がある学年を回るが5、6年生の外国語（英語）活動優先。AETが来ない日は、HRTだけで英語活動を進める日もあった。

#### 教師のプロフィール：

HRT1,2,3→2008年度担任 AET1,2→2008年度外国人教員（普段の授業はAET2(フィリピン出身 20代男性)が担当、AET1（アメリカ出身 40代男性）は市のAETのとりまとめの立場にある

AET2 が授業に来られないときや先生のトレーニングの日に代行でやってきた。)

HRT 2, 4→2009 年度担任 (HRT2 は 2008, 2009 年と 6 年生の担任をした)

AET3 →2009 年度外国人教員 オーストラリア出身 20 代女性

＜当該小学校をフィールドとした理由＞

①当該小学校は、必修化に先駆けてのモデル校のケースで、全国の公立小学校での必修化後の外国語（英語）活動の典型例としてみることができる。

この研究の最終的な目的は、本研究において見いだされた児童のもつ情意を、2011 年 4 月から 5,6 年生に必修化された今後の公立小学校での外国語（英語）活動の現場において、活かしてもらうねらいがある。市の外国語（英語）活動の研究校、モデル校を複数年経験してきた当該小学校は、カリキュラムなどがある程度整えられ、教師も英語を教えることに慣れ、すでに外国語（英語）活動が体系的に行われるシステムがあり軌道にのっている。

このような必修化後の典型例となるような必修化前のデータを検討することは有益である。

②他の要因に左右されずに外国語（英語）活動に焦点をあてた情意の調査に最適な小学校である。

A 小学校では、落ち着いた環境で外国語（英語）活動が行われている。一軒家の多い閑静な住宅街の中にあり、小学校の近くには高級スーパーマーケットがある。児童は中流以上の家庭出身者が多く、塾が立ち並び、教育熱心な地域である。インタビュー対象者のいる実際の外国語（英語）活動を観察して授業態度問題のある児童は数人みられるものの、学級全体としては、児童はおちついて外国語（英語）活動に集中して参加している。週一回（金曜日）AET(Assistant English Teacher)の派遣があり、年 3 回教師対象の英語の校内研修を行い教師も英語活動の指導に熱心である。また、外国語（英語）活動を担当した学級担任（HRT）は比較的若い世代の教師達（20 代から 40 代）であり、外国語（英語）活動への理解もあり熱心に取り組んでいる様子であった。このように安定した外国語（英語）活動に参加している児童にインタビューするということは、外国語（英語）活動の範疇以外の情意が邪魔することなく（学級崩壊が原因で生まれる情意など）外国語（英語）活動の体験中の児童のもつ情意について知るにふさわしいと期待される。

方法論的限定→インタビューデータは、A 小学校が必修化前のモデル校である時に取られたものであり、必修化された今では同じ状況化でのデータの追加収集はできない。インタビューデータで抜けている部分は、フィールドノーツで埋める作業をする予定（トライアングレーションによる「データの厚み」）

#### 4. M-GTA の分析焦点者

M-GTA の分析対象者をインタビュー対象者となった「大阪府下の外国語（英語）活動モデル校の公立小学校（A 小学校）において必修化される前の外国語（英語）活動を体験した 6 年生児童 43 名」とした。

→（修正）「公立小学校において外国語（英語）活動を体験した 6 年生児童」

## 5. 分析テーマ

「公立小学校6年生児童の外国語（英語）活動中におこるネガティブな感情からポジティブな感情へのダイナミズムを経て外国語（英語）活動へより意欲を高めるプロセス」

## 6. 分析テーマへの絞り込み

①「公立小学校6年生児童の外国語（英語）活動体験をめぐる心の動き(情意)の明確化」

「活動体験をめぐる」範囲が広すぎてまとまらない。焦点がぶれる

→②「公立小学校6年生児童の外国語（英語）活動体験中の心の動き(情意)の明確化」

M-GTA 特有の“うごき”が感じられない

→③「公立小学校6年生児童の外国語（英語）活動中におこる情意の動き」

20111228 にスーパーバイズを受ける

「流れが感じられるような分析テーマの方が良いということ（スタートとゴールを決める）」

分析しているうちに、＜わからない不安＞と＜伝わる喜び＞という2つの概念がそれぞれコアになって情意が関連していることに気づき「不安、とまどい」をスタートにして、「嬉しさ、楽しさ」をゴールに決める。

→④「公立小学校6年生児童の外国語（英語）活動中におこる『不安、とまどい』から『嬉しさ、楽しさ』へのダイナミズム」

分析中に、子どもたちは、最終的に『不安、とまどい』のようなネガティブな感情と、『嬉しさ、楽しさ』のようなポジティブな感情を行き来して（ダイナミズム）最終的にポジティブな感情に行き着いた先に、外国語（英語）活動をもっとしたいという意欲へ向かうのではと気付いた。

→「公立小学校6年生児童の外国語（英語）活動中におこるネガティブな感情からポジティブな感情へのダイナミズムを経て外国語（英語）活動への欲求の高まりへ向かうプロセス」

＜外国語（英語）活動への欲求の高まり＞という概念名をみなおし、＜外国語（英語）活動へより意欲を高める＞に変更しそれに伴い分析テーマも変更

## 7. M-GTAに適した研究であるかどうか

### ①“うごき”をみる研究であるということ

外国語（活動）は、コミュニケーション重視の活動である。従って、児童の情意も、コミュニケーションの活動に伴っておこると考えられる。Brown (1994)は、インタラクション(interaction)は、コミュニケーションそのものであるとした上で、2者以上がお互いに協力しあって考えや感じたことをやりとりすることと述べている。また、Brown (1994)は、外国語学習の教室においてのインタラクションから生まれる情意的な要素として、内発的動

機づけの向上やリスクを犯す危険（外国語でインタラクションする際に間違った解釈をしたり失敗して笑われたりする危険）を挙げている。まさに、小学校の外国語（英語）活動では教師（AET, HRT）と児童のインタラクション、児童と児童のインタラクションが多く行われる。そして、インタラクションに児童の中に伴い様々な情意が生まれ、児童の情意が影響をうけているという状況がおこっている。インタラクションという“うごき”のある行為の中で生まれる情意は、“うごき”を伴っているといえる。外国語（英語）活動中の情意の“うごき”を見るためには、「ある“うごき”を説明する理論を生成する方法」（木下, 2007, p.67）であるM-GTAは適していると言える。

## ②理論を生成する研究であるということ

本研究は、量的研究にみられる、従来の外国語学習、第二言語学習における情意要因の研究をもとに、ある情意要因があると仮定してどのような情意要因が多くみられるか検証し、その情意要因の関係性を見ていく研究ではなく、従来の枠にあてはまらない公立小学校での外国語活動だからこそ起こりうる児童のもつ情意について知ることが目的であるため、公立小学校での外国語活動における児童のもつ情意についてどのようなものがあり、どのようにお互いが影響し、関連し合っておこっているのかということモデル化し、理論を生成することが目的である。

## ③データを切片化しない分析技法であるということ

子ども対象のインタビューは、質問に対しての回答が短い。一言で返答する、「はい」、「いいえ」でしか答えないことも多い。このような場合は、インタビューとインタビューのやりとりを切片化せずに、文脈でとらえていくことは非常に重要であると考ええる。

## ④インターラクティブ性：現場に戻していくことを一番に考えた研究であるということ。

### I. データ収集段階

分析対象者である43人の児童には、彼らの参加する外国語（英語）活動の様子を観察する期間を経てインタビューを行った。外国語（英語）活動を行ったHRTとも授業外に会話交わし児童の普段の様子を聞くなどした。それによって、研究者である「私」もインタビューの前に児童のことをよく知る機会があり、児童は、研究者である「私」の存在を「大学院生の田村さん」として認識をした。その何人かとは授業内外での会話を通して関係性を築くことに成功した。インタビューでは、「私」が観察中に思ったことや疑問を児童に聞きながらインタビューすることができ、それによって児童が語りやすくなったと考える。

### II. 分析結果の応用段階

分析結果の応用者は、公立小学校の6年生の外国語（英語）活動を教えるHRTやAETである。HRTやAETは、授業中に児童がもつ情意は（外国語（英語）活動中に児童がネガティブな感情とポジティブな感情に行き来し英語活動へのより意欲を高めるプロセスは、）HRTやAETの行為や、指導スタイル、児童が参加するアクティビティーの性格に影響を受けているということを念頭に外国語（英語）活動を進めていくことが重要だと考える。



## 8. 分析結果

分析シート（一例）、結果図、カテゴリー生成、ストーリーライン（すべて回収資料参照）

## 9. 理論的メモ・ノートはどのようにつけたか

理論的メモ：概念が出来上がるたびに、この概念はすでに生成されたどの概念と関連するのかを記載していった。また、スーパービジョンや、大学院の先輩からのアドバイスを受けて、何度も概念名をみなおしているのも、旧概念名や統合した概念名をメモに残した。対極例や類似例がみつければ、その場で記載し、今後もう一度データを見直してでてくるかもしれない対極例の可能性もメモした。

理論的ノート：Evernoteを使用して、分析した際に思いついたことを日付とともにタイトルにして、記入していくようにした。また、スーパービジョンの際のメモや必要事項をEvernoteに転記した。また、手書きができるノートを用意して、分析シートをみながら図の作成する際に手書きでまず作成した。そのときの日付も残した。一旦ワードファイルで作成した図の修正追加に関しては、オリジナルのものに上書きするのではなく誰のアドバイス後にいつ修正したかわかるように日付とともに新たに別タイトルでワードファイルを保存した。

現象特性をどのようにとらえたか：今まで日常になかったまなびの活動に参加することになると、人はその活動中におこる様々な要素の働きかけによってネガティブな感情とポジティブな感情を行き来する。最終的にポジティブな感情が強くなるともっと活動に参加したいという活動へのよりいっそうの意欲を高めていく。

## 10. 分析を振り返って

1. 分析テーマを定めて常に念頭に置いて分析することが大事。

2. 分析テーマを定める際に、“うごき”やプロセス性を出すために、分析のスタートとゴールを決める。本研究の場合、当初の分析テーマで行った分析が終わったときに、＜わからない不安＞、＜伝わる喜び＞という二つのネガティブ、ポジティブな旧概念がコアな情意になっていることに気づき、スタートとゴールをここに定めて分析テーマを見直した。

3. 必ずしも、ネガティブな感情からポジティブな感情に行き来する間に働く要素が、直接ネガティブな感情やポジティブな感情にある概念に関連しているわけではないということ。この処理をどうするかが（M-GTAでは、関連していなくてもよしとするのか？）今後の課題であり疑問点である。

4. ＜外国語（英語）教育への意欲を高める＞という概念は、ポジティブな感情である【楽しさ・喜び】のカテゴリーの中にある、～の活動に対しての喜び、～することの楽しさといった何か存在するものへのポジティブな気持ちとは違う位置づけ（外国語（英語）活動がもっとこうなったらいいのにと感情）と感じた。存在するものへのポジティブな感情から＜外国語（英語）活動へより意欲を高める＞ところに向かっていくきっかけになる

ようなはっきりとした概念が今回の分析では見いだせなかったので、インタビューデータをもう一度見直していきたい。

#### 参考文献

Brown, D. H. (1994). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall Regents.

Carreira, J.M. (2006). Developmental trends and gender differences in affective variables influencing English as a foreign language learning among Japanese elementary school pupils. *JASTEC*, 25, 57-73.

木下康仁 (2003). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践-質的研究への誘い-』 弘文堂.

木下康仁 (2007). 『ライブ講義 M-GTA-実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』 弘文堂.

國本和恵 (2006). 「英語の好感度」が小学4・5年生の英語学習動機づけに及ぼす影響 『日本児童英語教育学会紀要』, 25, 75-87.

Nishida, R. (2008). An investigation of the Japanese public elementary school students' perceptions on motivation and anxiety in English learning: A pilot study compared from 1<sup>st</sup> to 6<sup>th</sup> graders. *LET*, 45, 113-131

Nishida, R. (2009). Exploring a content based approach with young EFL learners to enhance language learning motivation. □ 『小学校英語教育学会紀要』, 9, 39-46.

松宮奈賀子 (2005). 児童が不安を感じる英語活動場面とその要因の模索 『日本児童英語教育学会紀要』, 24, 57-69

松宮奈賀子 (2006). 児童が好む活動に関する意識調査: 不安の強さに焦点をあてて 『日本児童英語教育学会紀要』, 25, 89-107

松宮奈賀子 (2009). 小学校英語活動における児童の「不安の強さ」と「求める教師支援」との関係 『広島経済大学研究論集』, 31, 53-70.

松宮奈賀子 (2010). 小学校英語活動における児童の不安に関する実態調査 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 59, 107-114.

元田 静 (2005). 『第二言語不安の理論と実態』 溪水社

文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』

<http://www.fuku-c.ed.jp/center/contents/kaisetsu/gaikokugo.pdf>

文部科学省 (2008). 『小学校学習指導要領 (外国語活動)』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm)

文部科学省 (2008). 『中学校学習指導要領 (外国語)』

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm)

\*WTC の訳語 (外国語を使って他者と対話する意思) の引用文献

八島智子 (2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機 -研究と教育の視点-』 関西大学出版部

## 【当日いただいたフロアからご質問、ご意見】

1. 対象が小学生ということで、子どもたちが思っていることの言語化ができにくいだろうということで工夫するのは重要なことだと思った。フィールドノーツやVTRはデータの中に入っているか？インタビューだけで、小学生の言っていることは、網羅できただろうという判断があったのか？
2. 学校教育外のところに、熱心に通わせている家庭もあったりするが、そのような子ども達も分析対象者として含まれているのか？ネガティブな感情からということだが、本当に全員がネガティブな感情を持っているのか？中には、積極的にいっている、最初からネガティブでない人もいるのではないのか？
3. 自分がうん十年前に英語を習う前に、小学校六年生の時に感じたことを覚えていて、そのときにわくわくしたり、ドキドキしたり、そういう複雑な感情をもって飛び込んだ感じがあるのだが、今回の発表の中でそういう子どもたちの感じが伝わってこなかったが、その感じは、今回インタビューした中であらわれているのか。現れたとしたらその心の有り様をどのように捉えたのか？
4. （発表者の「一回目の分析でたくさん概念ができてしまって、抽象度をあげようといろいろな概念を関係性をみながらくっつけていった。」という発言を受けて）抽象度を上げようといろいろな概念をくっつけてと言っていたが抽象度は、深く解釈すれば上がってくる。解釈が深くなればいろんなものがくっついてくる。抽象度を上げるためにいろいろな概念をくっつけるという表現は、逆ではないか。概念名に対する解釈が深くなれば、データからヴァリエーションが自然に吸い寄せられる。
5. M-GTA の分析焦点者の意味を理解していないのではないのか。「大阪府下の外国語（英語）活動モデル校の公立小学校（A 小学校）において必修化される前の外国語（英語）活動を体験した6年生児童43名」では、この43名しかあてはまらないということになる。（ご指摘を受けて、レジュメの分析焦点者を訂正して書き直しました。）M-GTA では分析焦点者の視点から、あるカテゴリーから見ていくということなので、「小学校で英語の授業を受けている小学校6年生」というようなカテゴリーで見ていくということ。分析焦点者と分析テーマという2つの角度からM-GTA は分析していくということ。研究する人間の視点がわからなかった。田村さんがどういう立場がここで研究していて、どういう熱意でどういうことが分かりたいと思って、どういうことを現場に返していきたいということが伝わってこない。一番これがわかって、これはすごく自信をもって現場の先生にこういう点は返していけるという概念とか、分析結果はどこなのか？本当にM-GTA がベストなのか？子どもが言語化するのが十分でなかったりする部分はビデオエスノグラフィーのような形で分析するのも、質的な研究法の一つの手かとも思う。

**【SV から頂いたコメント】**

- \* 分析テーマと分析焦点者に若干ずれが出ている印象を受けた。分析テーマと結果図にずれがあるのではないかな。結果図は分析テーマを網羅している感じではあるが、とても流れが見える部分もあるが、後半の意欲を高めている部分では（流れが）薄くなっている。おそらく概念を作るときに、分析テーマの中でも焦点を当てる部分がずれているのかなと思う。分析テーマがはたしてこれで良かったのかということをもう一度検討した方がよいと感じた。研究の着地点をどこにもっていくのかということをもう少し考えてすすめていただければと思う。
- \* **【SV】**：この分析テーマ、研究自体が 5,6 年生から英語教育を始めることが有益だということが前提にある印象があったので、その部分に関して、そういう前提を支える研究だと把握してよいのか？
- \* **【発表者】**：私の中では、制度的なもので始まってしまった外国語（英語）活動で、HRT が突然教えることになって、きちんとした統一カリキュラムや研修制度がない混乱したまま始まったので、そういう制度に対して、どういう対応したらいいと言うことを考えて研究している。早期英語教育が良いとか、それで英語力がつくとは思っていない。なぜなら英語活動は英語学習という位置づけではないということと、必修化されたとはいえず、教科としての位置づけではないところがあるので、そういう意味で早期英語教育が有益だという視点には立っていないということです。

**【SV コメント】****都丸けい子（平成国際大学）**

「児童、教師、ALT の外国語活動体験をめぐる情意」という田村先生の博士論文の枠組みの中で、特に今回、児童に焦点を当てたご研究ということでご発表いただきました。発表時点ですでにデータの収集を終え、ある程度分析が収束を迎える段階でした。ただ、M-GTA でもっとも重要視される研究者の立ち位置に関するご説明が曖昧であったためか、分析テーマの意義に関する質問がフロアから出ていました。なぜこの研究が必要なのか、より具体的には、なぜこの研究を M-GTA を用いて行う必要があるのか？についての説明が不十分であった点是否めなかったと思います。そこで、以下では特に分析テーマに関してコメントをいたします。

事前のやり取りでは、分析テーマの設定に関して多くのディスカッションをさせていただきました。具体的には、なぜ M-GTA を用いてこの研究を行う必要があるのかに関することだったと記憶しています。さらに、外国語活動体験の中で生じるどのようなプロセスを検討したいのかについても、問いかけをさせていただきました。ご研究のキーワードは「情意」でした。外国語活動に関する先行研究において重要な概念であることは、田村先生のご説明から十分に納得することができました。しかし、それをそのまま分析テーマに立ちあげることに危惧いたしました。M-GTA では、結果の現場での実践的有効性に鑑みた場合、

研究者自身の視点およびデータと照らし合わせ、以下の問いに答える必要があると考えます。それは、「情意のこういった側面について明らかにしたいのか?」、「そもそも『情意』という語をそのまま用いることが適切なのか?」、「ところで、誰に対しどのようなプロセス（動き）をなぜ明らかにする必要があるのか?」という問いです。

結果的には、分析テーマの立ち上げに関する上記の問いの確認や、分析テーマそのものの調整に関して十分に議論を深められないまま、発表当日を迎えてしまったように感じます。この理由として、発表期日までの時間に追われてSVが焦りの気持を持ってしまった点、また、すでにある程度の分析作業を終えてしまっているために、それがSV自身の足かせになってしまった点がありました。これは、SVをさせていただいた私自身の反省です。ただ、今回の経験から、分析がある程度収束しつつある段階での分析テーマの再検討は、（時間的・労力的・精神的に）ある程度の覚悟を要することが分かりました。このような事態が生じないためにも、分析を始める以前および初期段階での分析テーマの継続的な検討は、欠かせないと考えます。

田村先生はこれまで精力的にデータ収集をなさってきており、お手元にはとても質の高い豊富なデータがあります。本発表時には言語化が間に合いませんでしたが、より有意義な外国語活動に向けての教育現場への貢献という確固とした問題意識をお持ちです。ぜひ、再度分析テーマについてご検討いただき、またご報告いただければと思います。

【第2報告 科研班「ライフスタイルとしてのケアラー体験とサポートモデルの提案」から】

山崎浩司 (信州大学)

## 研究班の体制

- 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)  
ライフスタイルとしてのケアラー(介護・養育)体験と  
サポートモデルの提案

- メンバー

研究代表者: 木下康仁(立教大学)

研究分担者: 小倉啓子(ヤマザキ学園大学)

佐川佳南枝(熊本保健科学大学)

標美奈子(慶応大学)

中川 薫(首都大学東京)

山野則子(大阪府立大学)

山崎浩司(信州大学)

<研究期間>  
平成21年度  
～  
平成24年度

## 「ケアラー」とは？

- care + er = informal carer (⇔ formal carer)
- 主に日常生活の場(家庭や地域)で、養育・介護・精神的支援などのケア行為に携わる非専門職者



## ケアラーに注目する理由

- 人口の高齢化、家族の小規模化、医療の進歩、福祉サービスの拡充などにより、現在では日常的に育児・養育・介護に携わる人々(ケアラー)が急激に増加している。
- 家族周期および個人のライフサイクルにわたって、多様な形態でのケアが行なわれ、一般化した現象となっている。
- 公的制度も多様な人々をケア提供者・利用者として統合化する方向で変化しており、専門職ではないケアラーへの支援は、重要な政策的課題となっている。

## 既存のケアラー研究の偏り

- 親子間・配偶者間ケアへの注目
  - きょうだい間ケアへの注目は？友人間・恋人間ケアへの注目は？ ペット飼育主間ケアへの注目は？
- 女性ケアラーへの注目
  - 男性ケアラーへの注目は？
- ケアラーの抱える困難やストレスへの注目
  - ケアラー体験による正の意味づけや心身状態の向上への注目は？ 地域住民同士のケアが地域の支えになっていることへの注目は？
- ケア享受者とケア専門職・ケアラーとの関係への注目
  - 容易にケアを必要とする立場に移行しがちなケアラーとケア専門職との関係への注目は？
  - 専門職主導ではなく、ケアラー主導のセルフ・ヘルプ・グループにおけるケアラー体験への注目は？

5

## 研究の目的

- 本研究では、これまで社会福祉、保健医療看護、保育などの領域に限局化され、統一的視点から研究されることがなかったケアラーの抱える問題を、ライフスタイルとしてのケアの視点からアプローチし、実態の理解に基づく地域社会を舞台としたサポートモデルの提案を目的とする。



## ケアラー学の構築

6



## 研究の方法

- 多様な対象者の相互作用を横断的に分析
- 学際的アプローチ
  - 社会学
  - 社会福祉学
  - 看護学
  - 臨床心理学
  - 死生学
- M-GTAの統一的採用

7

## 個別研究 1

- さまざまなケアラー体験の把握
  - 高齢夫婦間介護（都市および中山間地）
  - 成人障害者介護
  - 子育て支援（虐待防止）
  - 障害児養育
  - ペット飼育・介護
  - 死別後のグリーフケア

• 身近な他者を支えることの困難さと意義  
• ケアラー体験と人間的成熟の関係  
• 具体的に必要なサポートの内容と形式、など

当事者の視点に  
肉薄して理論化

8

## 個別研究 2

- **高齢夫婦間介護（木下康仁）**
  - － 介護者のジェンダー別に、自身の老いと介護行為とが、夫婦の関係性を人生の終盤期において変容させていくプロセスを解明
- **中山間地における高齢夫婦間介護（佐川佳南枝）**
  - － 公的なサービスや地域のインフォーマルなサポートを受けながら介護を含んだ日常の世界がどのように成り立っており、そのなかで夫婦の関係性やケアがどのように意味づけられているのかを解明
- **成人障害者介護（標美奈子）**
  - － 成人期自閉症と認知症者の家族介護者を対象に、認知障害によるコミュニケーション問題の長期化に照準し、家族の生活体験の変容プロセスを解明
- **子育て支援[虐待防止]（山野則子）**
  - － 追い詰められた状況にある養育者とそうでない養育者とを対象に、子育て不安を抱え、孤立に至るプロセスを解明

9

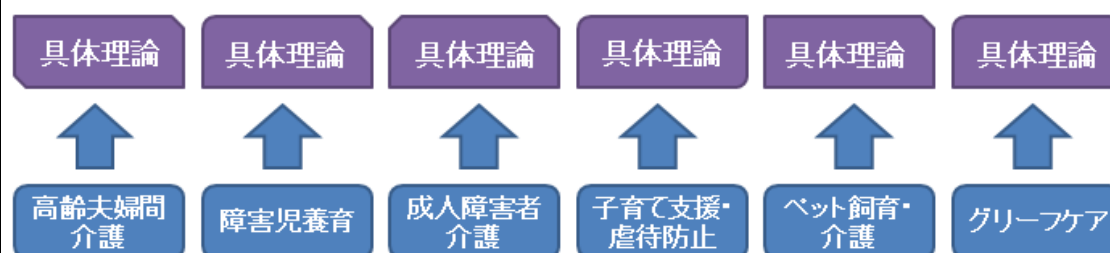
## 個別研究 3

- **障害児養育（中川薫）**
  - － 障害児育児に携わる親を対象に、彼らのケア役割規範との関わりのプロセスを、「役割拘束」を鍵概念として解明
- **ペット飼育・介護（小倉啓子）**
  - － ペット飼育者を対象に、ペットの日常的ケア、老齢化や病気への対処、ケア援助者との関係など飼育プロセスにおける飼育の意義と負担、飼育者サポートのあり方を解明
- **死別後のグリーフケア（山崎浩司）**
  - － 都市住民で配偶者と死別した非高齢者（60代未満）が、家庭やコミュニティで、どういったケアラーからどのようなグリーフケアを得て（得ずに）死別後の生活を続けていくのかといったプロセスを解明

10

## 個別研究 4

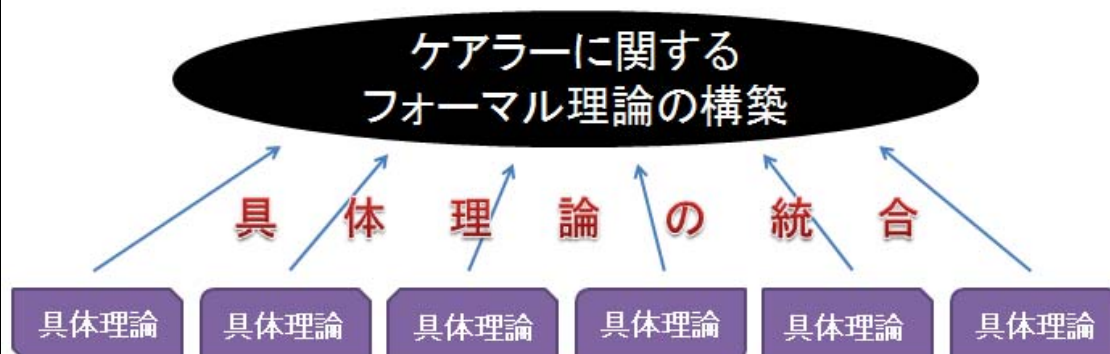
### ・ 具体理論 (substantive theories) の生成



11

## 統合研究の展望

- ・ 具体理論からフォーマル理論 (formal theory) へ
  - 具体理論を相互に比較分析
  - 共通性を軸にケアラー一般に適用可能な理論生成



12

## サポートモデルのデザイン案

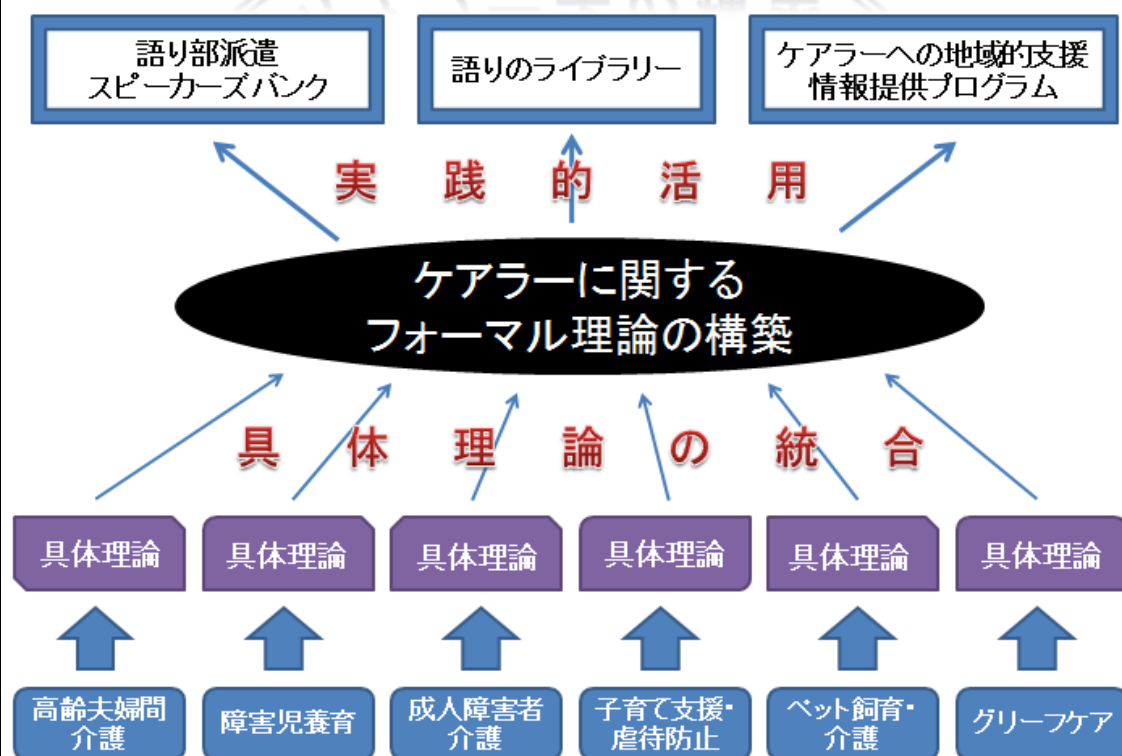
- ・ ケアラーの具体・フォーマル理論を踏まえて...
  - － 個別的なケアラー体験を共有する仕組みの創出
  - － 具体的な支援システムの整備を提案

例えば...

1. 語り部派遣スピーカーズバンク
2. 語りのライブラリー
3. ケアラーへの地域的支援情報の提供プログラム

13

## 《ケアラー学の構築》



## ま と め

- ケアラー学では・・・
  - － M-GTAを活用して理論化を目指す
    - ・ 個別具体理論から、より広範囲の説明力を有する理論へ
  - － 普通の人びとの日常生活の一部をなすケア体験、という領域を浮かび上がらせる
  - － ケアラーの抱える複雑な問題の構造や意味づけを明確にする
  - － 身近な他者との共生関係における意味を捉えなおす
    - ・ 人間・社会の成熟や生活の質(QOL)に関する研究の深化
  - － 研究結果の実践的活用として、具体的支援策を提案する〔まずはホームページで研究成果と提案を示す〕

## 「引退盲導犬飼育ボランティア活動の促進とサポートを考える—飼育ボランティア体験の質的分析から」

小倉啓子 （ヤマザキ学園大学）

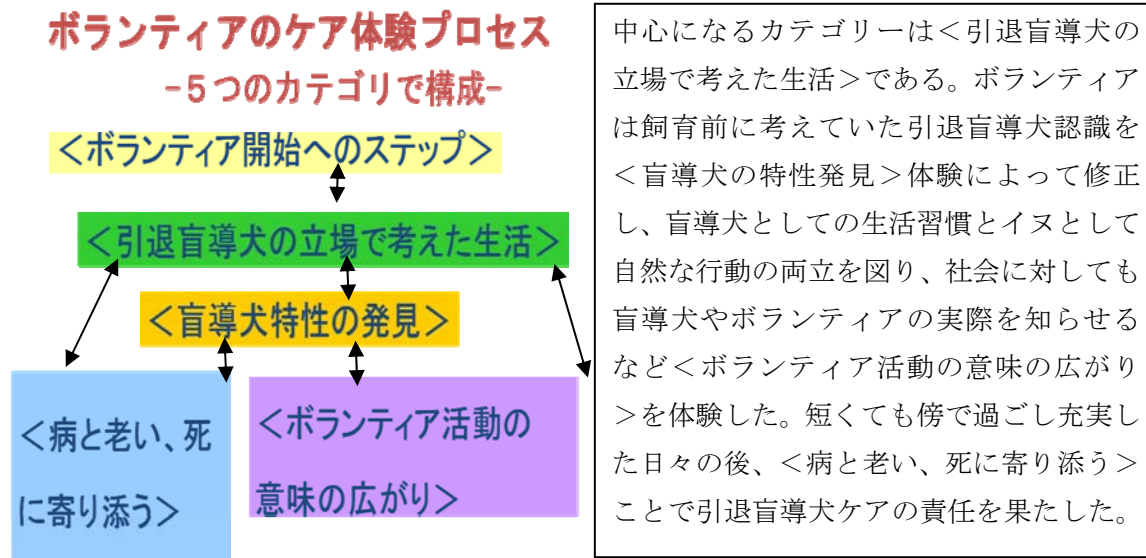
「(科研 木下班) ライフスタイルとしてのケアラー体験とサポートモデルの構築」の1領域としてペットの飼育をするケアラーの体験、飼い主の飼育体験の分析(M-GTA)を担当している。報告した論文は、そのなかの一つで、2009年、第3回日本身体障害者補助犬学会で、日本盲導犬協会のスタッフ2名との共同研究として口頭発表した。

1. 要約: 引退盲導犬飼育ボランティア活動の促進とサポートのための視点を得るために、5名の引退犬飼育ボランティアにボランティアの動機や引退犬との生活経験についてインタビューした。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的分析の結果、引退犬飼育過程でボランティアは<ボランティア開始へのステップ>、<引退犬の立場で考えた生活>、<盲導犬特性の発見>、<ボランティア活動の意味の広がり>、<病と老い、死の過程に寄り添う>という5つのカテゴリーにまとめられる体験をしていた。活動の促進には、人々が盲導犬に触れる機会や引退犬飼育ボランティアについて知る機会を多く提供して関心を深めてもらう、引退犬飼育は介護や看取りだけではなく充実感や親密感を味わい、社会的交流の体験の広がりを経験出来ることを広く知らせることが重要である。ボランティアのサポートとしては、訓練センターなど社会的連携のなかでいつでも安心して飼育出来るように相談窓口設置をする、出席しやすい交流の場を設けることなどが示唆された。

2. 研究テーマ・分析テーマ: 共同研究者と目的の確認・共有をした。飼育ケア体験をボランティアの立場から明らかにし、ボランティア活動の促進とボランティア・サポートに資する知見を得ることを目的とし、「引退盲導犬飼育ボランティア活動の促進とサポートを考える—飼育ボランティア体験の質的分析から」とする。

3. 資料: データ収集は協会側で行った。2007年12月～2008年11月、引退犬飼育経験が1頭～数頭のボランティア5名(女1、男1)にインタビューした。質問内容は飼育ボランティアの動機・引退犬との出会い-死別までの生活・サポート・周囲との関係・問題と課題である。録音し逐語録を作成した。データの特徴は、飼い主のケア体験の語り、盲導犬観、ケアの意識や主張が明確で、濃密なケア体験をしたことが窺える内容だった。素人の私ではなく、専門家によるインタビューが適切であったことを実感した。

## 4. 結果



#### 5. 現象特性：＊現象特性

全く縁がなかった相手を、ケアが必要となる高齢期になって自発的にケアを行い、相手の特性や生活習慣を発見して相手に対する認識を改め、生活歴を現在の生活にも活かして互いに楽しく自然に生きられるような関わりにしていく。

飼育ボランティアにおいては、要介護・自発的ケア・相手の生活歴を現在の生活に活かす・存在認識の変化がキーワードと考える。これらは、ケアに共通することではないか。

6. 援助的提言：活動開始の促進のために一盲導犬との触れ合いの機会を提供、引退盲導犬ボランティアについての広報。漠然とした関心を、明確なボランティアへの意思に後押しする働き掛けとして、経験者との交流、サポートシステムの周知、責任の範囲の明確化がある。活動開始後のサポートー 専門家とのつながりを作る、何でも相談窓口の設置、ボランティア同士の交流の場の設定などがある。

以上

#### 【第3報告 ミニセッション】

司会 山崎浩司 （信州大学）

「『M-GTA SV ガイドライン』の検討状況について(中間報告)」

竹下浩 （ベネッセコーポレーション）

「SV 経験者からのコメントー水戸美津子（自治医科大学）」

木下康宏 （立教大学）

「全体ディスカッション」

（略）

## ◇近況報告：私の研究

宮崎貴久子（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野）

はじめまして。M-GTA 研究会では、先輩諸氏、発表者の方々から、新たな研究の視点を頂いて帰るのを楽しみにしております。

今回、自己紹介する機会を頂き、改めて自分の歩んできた道を考えました。それは哲学から始まり、子育ての専業主婦時代を経て、心理臨床、死生学、そして現在の臨床疫学と、一見して何の脈絡もありません。しかし、自分の中のテーマは一貫して「今、生きている人間」です。学界で「専門は何々学」と言い切れないもどかしさを感じる一方で、その時々々のテーマに、一番フィットする学問体系に受け入れて頂いてきたと、感謝もしております。

研究方法を考える時、伝えたいスピーチ・コミュニティに理解される方法（言語）と研究テーマに最適な研究方法、この二つを大事にしています。ですから、プロトコル作成と倫理委員会申請までは、文献研究を含めて年単位の時間がかかってしまいます。現在の研究は、1)「緩和ケアへの移行と実施の円滑化に向けた研究：診療ガイドラインと QOL 評価の課題」（文部科研基盤研究 B、研究代表者）、2)「がん・緩和ケア研究推進の基盤整備に向けた研究」（文部科研挑戦的萌芽研究、研究代表者）、3)「生活習慣病受診中断と未受診の課題」、4)「緩和ケアの新たな展望」（予備調査中）、5)「義務教育教科書における病と死の記述」です。所属先が臨床疫学ですので、大規模なゲノムコホート研究のフィールド調査も手伝っています。

M-GTA 研究会では「参加者は M-GTA を用いた研究を実践して発表すること」と伺いました。現状は、質的研究方法のテーマであっても、「M-GTA が適切か」と考えると、「否、継続比較法か」「アクションリサーチか」などと逡巡します。いつか研究会で、M-GTA を用いた研究課題を発表し、皆様方のご意見を頂ける日が来ることを願っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

.....

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 森恵子

私は、現在、岡山大学大学院博士後期課程に在学中です。長期履修の制度を利用し、現在の職場で仕事をしながら、博士の研究に取り組んできました。今回は、現在博士論文として取り組んでいる研究についてご紹介させていただきます。研究の目的は、「食道切除術後の回復過程において補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程を明らかにし、看護実践への示唆を得ること」です。



私は、臨床で看護師として働いている時から、食道がんに対する治療、中でも手術を受けるために入院している患者と関わる事が多く、その中で、非常に侵襲の大きな食道切除術を受けても、早期に再発・転移を来す場合も多く、加えて、身体的・精神的回復の途上で、放射線治療、化学療法等の補助療法を受ける患者とも多く接してきました。そのような状況の中、できるだけ早期に手術、及び、補助療法に伴う侵襲から回復するために、看護師としてどのように援助を行うことが必要かということについて考えてきました。そのためにはまず、回復過程における患者の体験を明らかにする必要があると考えました。前任校である浜松医科大学に勤務している折に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (MGTA) と出会い、特に私が研究対象とする患者の体験にはプロセス性があることから、MGTA を用いて研究を行うことを決めました。

食道がんに対する治療目的で食道切除術を受け退院後 6 ヶ月以上経過し、術後補助療法が終了している外来通院中の患者 22 名を対象に、外来受診時に半構成的面接を実施しました。その結果、食道切除術後の回復過程において術後補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程は 2 つのコアカテゴリーで説明できる過程として説明できることが明らかとなりました (詳細につきましては、現在学会誌への投稿中ですので、記載を控えさせていただきます)。

研究を始めた当初は、MGTA に関する書籍、MGTA を用いて行われた研究、勉強会、定例会への参加などを通して、MGTA について学習を深めました。一連の研究プロセスの中で、私が最も難しいと感じたのは、対象者の語りである、質的データの背後にある意味の解釈と、分析ワークシートを作成しながら、類似例、対極例に付いて見極めていくことでした。現在、研究結果は、がん看護に関する学会誌に投稿し、一度の査読を経て、その結果を待っているところです。最終的に掲載受理に至った段階で、研究会において報告をさせていただければと考えています。今後ともよろしくお願いいたします。

.....

### ◇編集後記

- ・ 新たな年を迎えて、松の内に研究会を持つことができ、今年のM-GTA研究会の活動の躍動を予見するようなものとなりました。本年も、会員の皆様のお役にたつようなニュースレターを発行できますよう努力してまいります。ご意見、ご希望がございましたら、ご連絡いただければと思っております。なにとぞ、ご協力、よろしくお願いいたします。（林）
- ・ 定例の研究会に久しぶりに参加しました。忌憚なく自由に意見を交換できる研究会の雰囲気がとても懐かしいものに思え、またとても貴重な場なのだとあらためて思いました。会員であるならば研究会を聞くだけで、SV経験者や会場から多くの意見をもらえる機会を活用しないのは、非常に損だと思います。ぜひ研究会で発表してください。様々な分野の新しい視点の研究に出会えることをとても楽しみにしています。（佐川）
- ・ あけましておめでとうございます。1月7日に新年早々定例研究会を開催しましたが、そこでM-GTA研究のスーパーヴィジョンに関する議論がありました。その議論を通じて、私はM-GTAが単なる技法や方法ではなく、研究する人間である己を問うものなのだと認識をあらためて強めました。会場でふと頭に浮かんできたのは、「人間学としてのM-GTA」という言葉です。M-GTAを活用した研究を終えても、M-GTA研究会から容易に離れていかない人たち、自分の体験や獲得したものをシェアしていきたいと思う人たちは、きっとM-GTAに対して人間学的な魅力を感じているからなのではないか…そんなことを考えました。今年も皆さんと研究会で一緒にさせていただけるのが大変楽しみです。どうぞよろしくお願いいたします。（山崎）
- ・ 時々、この歳で、この期に及んで「勉強しときゃよかった～」と思ったりして情けなくなることがあります。でも、今回、それもあながち悪いことではないかも、と思いました。若い頃は「動機」が無かったけど、今は長年の仕事経験から「おや?」「なんとかしなきゃ!」という思いが出てきており、そこに取り組むのが大事なのかな、と。人によっては、居酒屋で後輩にお説教とか、講演会というやり方もあるでしょうが、ここにいる皆さんは、人生のどこかの段階で、研究として取り組むことの大事さに気づかせてくれた「出会い」を持つ、幸運な方々ではないでしょうか。7日の研究会でも、色々教えて頂き有難うございました。勉強になりました（頭で判ったつもりでも誤解を招く書き方とか）。同じように、私たちの編集後記、少しでもお役にたてれば幸いです。それでは、編集局一同、今年もどうぞ宜しく願い申し上げます。（竹下）